

ウイルスや細菌が原因となるがんはたくさんあります。肝臓がんの原因の8割程度がB型、C型の肝炎ウイルスです。子宮頸(けい)がんでは、原因のほぼ100%が性交渉に伴うヒトパピローマウイルス(HPV)の感染です。胃がんでも、幼い頃のピロリ菌感染が原因の98%といわれます。母乳を通して感染するウイルスが原因となる白血病もあります。

ウイルス、細菌の感染は、日本人のがんの発症原因の約2割を占め、喫煙率の低い女性では、発がん原因のトップです。欧米では、がんの病因のうち、5%程度が感染症とされていますから、日本のがんはまだ「途上国型」のタイ

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

ウイルス・細菌原因の2割

ルスを取り除くようになり、肝臓がんの死亡率は10年で半減しています。冷蔵庫の普及によって、新鮮な食品を口にできるようになって、ピロリ菌の感染率が激減し、胃がんも大きく減っています。

しかし、子宮頸がんは検診の普及で減少していましたが、2000年ごろより再び増加に転じています。性行動

しましたが、いまや、ほぼゼロとなつています。この結果、接種が進んだ20代前半の女性だけ、将来の発がんリスクが半分程度になるといふ不公平が生じています。海外では、男子への接種も行われており、日本だけが取り残されています。ただ、ワクチンによって子宮頸がんが本当に減るかどうかはこれまで確認されておらず、「ワクチン不要論」の論拠の一つとなってきました。

プが多いといえます。これは、たった一つのがん細胞が増殖を開始してから検査で発見される1ヶ月程度になるまでに20年といった長い年月を要するためです。今日見

つかるがんは、20年前の日本社会を反映しているからです。

の变化や検診受診率の低下が背景にあると思います。もう一つの問題が、HPV

予防ワクチンです。13年から定期接種となったこのワクチ

んは、接種率が一時8割に達結果が掲載されました。次回、詳しく解説します。

(東京大学病院准教授)